

うるくの歴史と文化を語る会

会報 ガジャンピラ

第 18 号

発行：うるくの歴史と文化を語る会
 発行人：赤嶺健治 編集人：赤嶺和雄
 〒901-0153
 那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内
 TEL. (098) 857-1175 FAX. (098) 852-1486



赤嶺 健治

(うるくの歴史と文化を語る会 代表)

代表就任のごあいさつ

私こと、平成26年6月26日に開催された本会の第12回定期総会で、第3代目の代表に選出されました。これまで、當間一郎代表の下で副代表を務めてまいりましたが、まだまだ勉強不足、力不足であることを痛感しています。しかし、選ばれた以上は、微力ではありますが、精一杯務めさせて頂く所存ですので、役員はじめ会員の皆様の、これまで同様の本会へのご支援とご協力を切にお願い申し上げます。

本会は、平成14年5月に発足して以来、小禄の歴史と文化をこよなく愛し、誇りとする初代代表新垣敏雄氏と2代目代表當間一郎氏のリーダーシップの下、会員の皆様の熱意に支えられて、目覚ましい実績を積み上げて今日に至っております。この場をお借りして、両氏への心からの労いの気持ちと共に、敬意と謝意を表します。また、有能な事務局スタッフの心強い支えにも感謝いたします。

本会の活動実績の主なものとしては、まず毎年度の定期総会での記念講演があります。これらの講演会では、著名な専門家や研究者をお招きして、小禄地域に関する諸問題について講演して頂きました。お陰様で、私たち会員は啓発され、問題意識と知識を深める機会に恵まれました。専門家の方々には、今後ともご指導を仰いでまいりたいと存じます。

次に、小禄地域の名所旧跡やゆかりの地を訪ねる「うるくまーい」は平成26年3月16日までに第9回目を実施し、うるく地域をかなり広く回って、その都度、再認識や再発見の驚きや喜びを体験してまいりました。また、本会の機関誌ともいえる『会報ガジャンピラ』は平成26年6月26日までに第17号が発行されています。会報には、記念講演要旨のほか、「うるくまーい」の報告や会員の貴重な研究成果などが掲載されており、今後さらなる内容の充実が期待されます。

小禄の歴史と文化についての興味や関心は、本会の会報のほか、会員が維持し、日々充実させている「小禄—OROKU—うるく」などのホームページを通じて、かなり広まりつつあることが認められます。このことについて、会員の皆様と共に喜び合い、励みにしたいと思います。

本会発足以来13年が経過し、会員の知識と関心はかなり深化していますので、今後は外部の専門家の講演を拝聴するだけでなく、会員同士が交流を深め、知識を出し合い、語り合う機会を持つことも有意義であろうと考えます。「語る会」は「語り合う会」あるいは「語らう会」でもある筈です。この件については、皆様と相談しながら、実現させてまいりたいと存じます。

最後に、本会ならびに小禄地域のますますの発展と会員の皆様のご健勝を祈念して、代表就任のごあいさつといたします。



第 12 回定期総会



第 1 回幹事会・編集委員会



上 地 浩

(うるくの歴史と文化を語る会 副代表)

副代表就任のごあいさつ

副代表に就くことになりました。面映ゆいなどとも言っておれず、指名されたからには任務は全うするつもりです。皆様のご協力、ご指導を切望致します。

うるくの歴史と文化を語る会、この会に入会当初、友人に話すと、この高尚な名称に友は驚いた。それはアカデミックなものとの不釣り合いな自分に驚いたのが本音であることは承知していた。

それでは名称に恥じないようにと、一念発起あれやこれやと、沖縄に関する歴史の本を読み、講演会には可能な限り顔を出す。史跡めぐりや図書館通いをする。面白いことに、これまで何の関心もなかった事柄が、歴史という見えない糸に引っ張られ、ずるずると引き込まれていく。

何年か早く気付けばよかったのにと悔やむ反面、未だ間に合うと、自分特異の宿命論で納得し、間近にあるはずの未知の終着駅に着くまでに、少しでも満足に近づけるよう頑張る気が起こってくる。

歴史とは時が経てば、何事も立派な歴史だと思えるようになった。マスメディアでも言われる何々は何年の歴史、又は100年の歴史とか言っている。100年の歴史とは、101年前にはなかったという事である。身の回りに起きる諸々の事が、何拾年、何百年が経つと立派な歴史を刻んだ事になる。

マスメディアに取り上げら、反響の大きな事だけが歴史として残るのではない。その規模であり、重要性にもよるが、今の我々が知りたいと思う事、その裏返しの、いわゆる身近な事の積み重ねが後年の立派な歴史となるのです。

「お年寄りが一人欠ける事は、図書館の一つが無くなるのに匹敵する」といわれる所以である。若し、この拙文が目に残ることがあれば、是非ご参加下さい。名称のとおり、嘘偽りなく、小祿の歴史と文化を吸収することが出来ます。又、年一度は地域に点在する史跡や文化に関するところへの見学会があり、これを“うるくま〜い”と言っています。

第12回総会を開催す

平成26年6月26日にJAおきなわ小祿支店3階ホールにて総会を開催しました。活動報告、会計報告、事業計画、役員改選が承認されました。

新役員は次のとおりです。代表 赤嶺健治、副代表 上地浩、顧問 新垣敏雄、當間一郎、事務局長 赤嶺和雄、会計 長嶺文雄、監査役 新崎清光、幹事 上原健秀、高良肇、金城新栄、赤嶺健次、新垣正則、長嶺弘善の各氏が就任いたしました。

総会終了後に幹事の上原健秀氏による『「明治期の高宮城地籍図」が文化財に』をテーマに記念講演が行われました。



講師：上原健秀氏



懇親会

今回は、平成14年3月16日に行われた第9回「うるくま〜い」の視察先を特集しました。
安次嶺御嶽、赤嶺御嶽、金城御嶽、ガジャンピラ公園です。

赤嶺御嶽

幹事 長嶺 文雄

赤嶺御嶽は那覇市赤嶺緑地にある給水塔（俗称：上ノ毛・赤タンク）の南斜面に位置する。赤嶺地区は、軍用地が返還された後、那覇市小禄金城地区土地区画整理により住居・商業地域として街づくりがなされてきた。戦前は、御嶽を要として南斜面に向け扇状に区民の住居が広がっていた。仲本門中に残された「仲本の由来」には、古代赤嶺部落は安里の御嶽（トヌ）、安里の井戸（カー）の周辺にあった。慶長の役後、琉球王から『肥沃な土地を部落にしてはならぬ、部落は廢地を利用し肥沃な土地は田畑にせよと』命令された。それで赤嶺部落も安里原（現在のモノレール沿線・赤嶺安里原バス停付近）から赤嶺原へ御嶽も新しく移した。（中略）以来赤嶺の御嶽は部落の中央山手の方であって琉球松の巨木が空高く繁り部落は盆地のような地形ではあった。と記されている。

また、琉球国由来記（1713年首里王府）によれば、小禄間切「赤嶺ノ嶽」は神名「ナエカサノ御イベ」であり赤嶺村に在する。と記載されている。赤嶺ノ嶽、安次嶺嶽、当間ノ嶽の三箇所を、赤嶺ノロが管轄していた「赤嶺巫崇所」（アカミネノロタカベドコロ）。

明治生まれの古老によれば、赤嶺ノロは、当間に住まわれており、祭祀の折には馬に乗って各嶽の神事を取り仕切っていたと伝わっている。

1953年4月に字宇栄原「佐安志原」の地に、新たに御嶽を移設建立することとなる。その際、旧部落に点在していた拝所（殿、井戸、御嶽など）は合祀された。終戦後の赤嶺部落は米軍による土地接收が行われ、入域が制限されたことによる。軍用地として接收された他字も御嶽・門中墓を同様に移設された。

1998年（平成9年）3月字民は、御嶽を本来の場所に戻したいと那覇市に要請し、土地区画整理完了後に赤嶺緑地の一部を借用し御嶽を移設建立した。

区画整理の際「上ノ毛」一帯も区画整理の線引きがなされ、住宅地として換地処分される計画で御嶽消滅の危機であった。マスコミへの投稿、地主会・建築士的那覇市への御嶽保存の要請で、現在の赤嶺緑地として保存されることとなる。

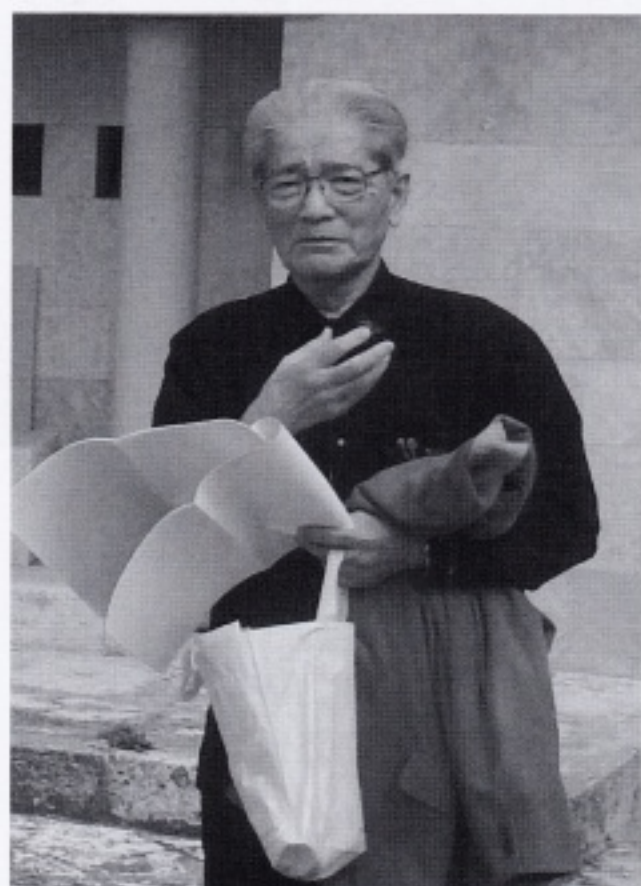
五月ウマチー、旧正月初拝など自治会・門中が集い、豊作・繁盛・健康祈願を行っている。御嶽は正面右から、産井、仲間井、ノロ井、上ノ御嶽神井、地頭火神ノ神井、安里井、安里ノ殿、金満御嶽、金満アジシ、火神殿内ノ御嶽、上ノ御嶽、上ノ御嶽火神、西ノ御嶽の計13拝所が合祀されている。



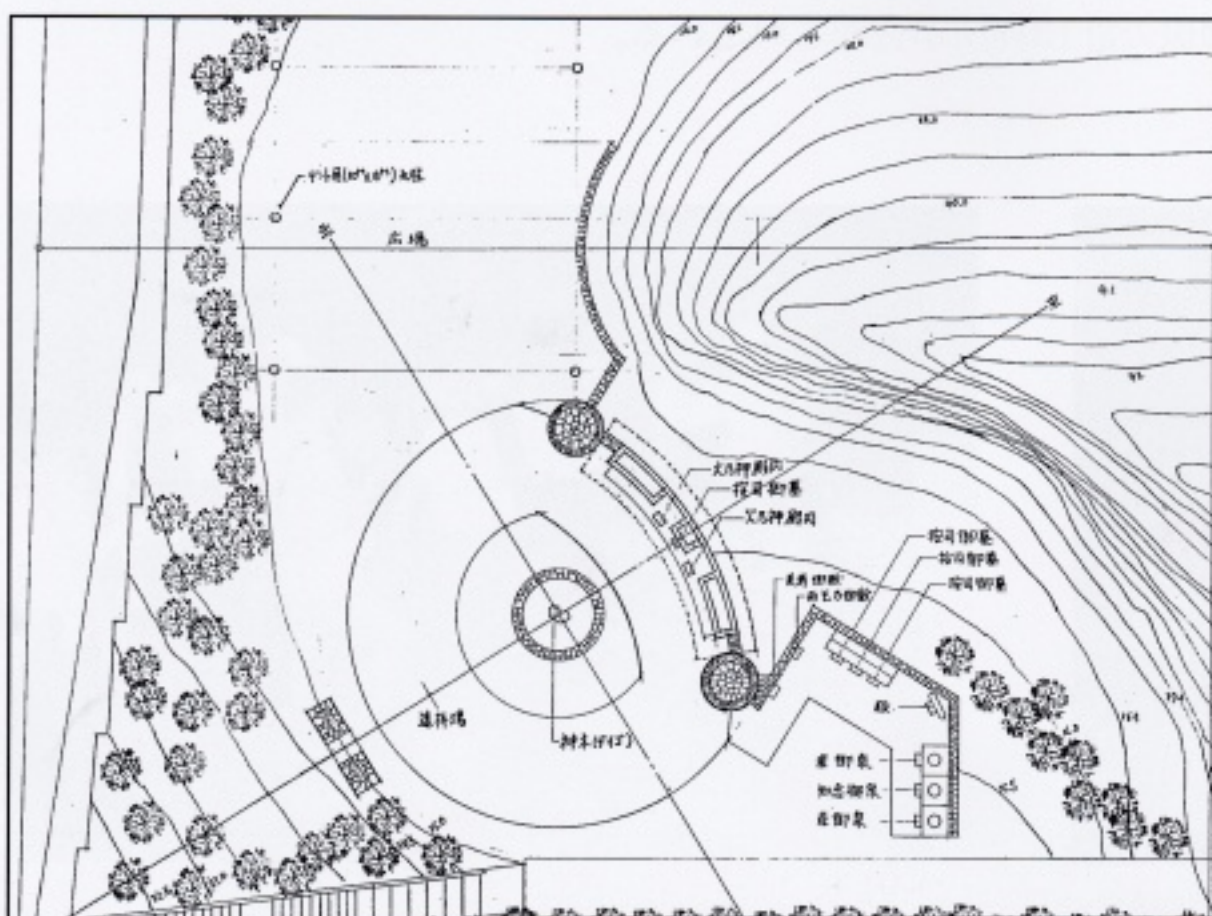
安次嶺又御嶽

事務局長 赤嶺 和雄

安次嶺御嶽はこの地「上ヌ毛」に在った。「上ヌ毛」は「琉球国由来記」（1713年首里王府によって編纂）に記載されている歴史的場所である。戦後は基地に接収され、自由に拝めなくなって、1952年に小禄中学校南側裏門の近くに基地の中の「上ヌ毛」から引っ越したと根屋の當間さんから聞いた。戦前、小禄金城地域には字安次嶺、赤嶺、金城、田原の集落があり、「上ヌ毛」には安次嶺又御嶽、赤嶺又御嶽がある聖地であった。基地内の安次嶺又御嶽は米軍によって一度壊されかけたことがある。デイゴの木を壊そうとした、ブルドーザーが横転し、作業員が怪我をしたり、腹痛を起こしたりした為、工事がストップしたと言う話が伝わっている。この話が聖地を守ってきたことは確かだ。この聖地（安次嶺・赤嶺又御嶽）は35年におよぶ米軍の統治下における、基地内においても原形をよく残していた。1980年(昭和55年9月に返還された。関係地主の協議の結果、1983年から小禄金城地区土地区画整理事業が始まった。当初の計画では「上ヌ毛」が仮換地で宅地になる計画になっていた。御嶽というのは、村を守護する祖霊神の魂がその杜の中、いわゆる丘の大地の中に潜んでいると考えられてきた場所。そうして神々が快適に過ごされるべく木々に手を付けることが禁じられてきた場所なのである。真っ先に市長と市議会に対し、「上ヌ毛」を残すよう要望書の提出を、地主会、建築士会那覇南支部で行い、なんとかそれを実現させたのである。その結果戦前に在った「上ヌ毛」に1998年によく戻ってきたのである。



字安次嶺の歴史を説明する當間一郎氏 安次嶺又御嶽にて 第9回うるくま〜い 2014年3月16日

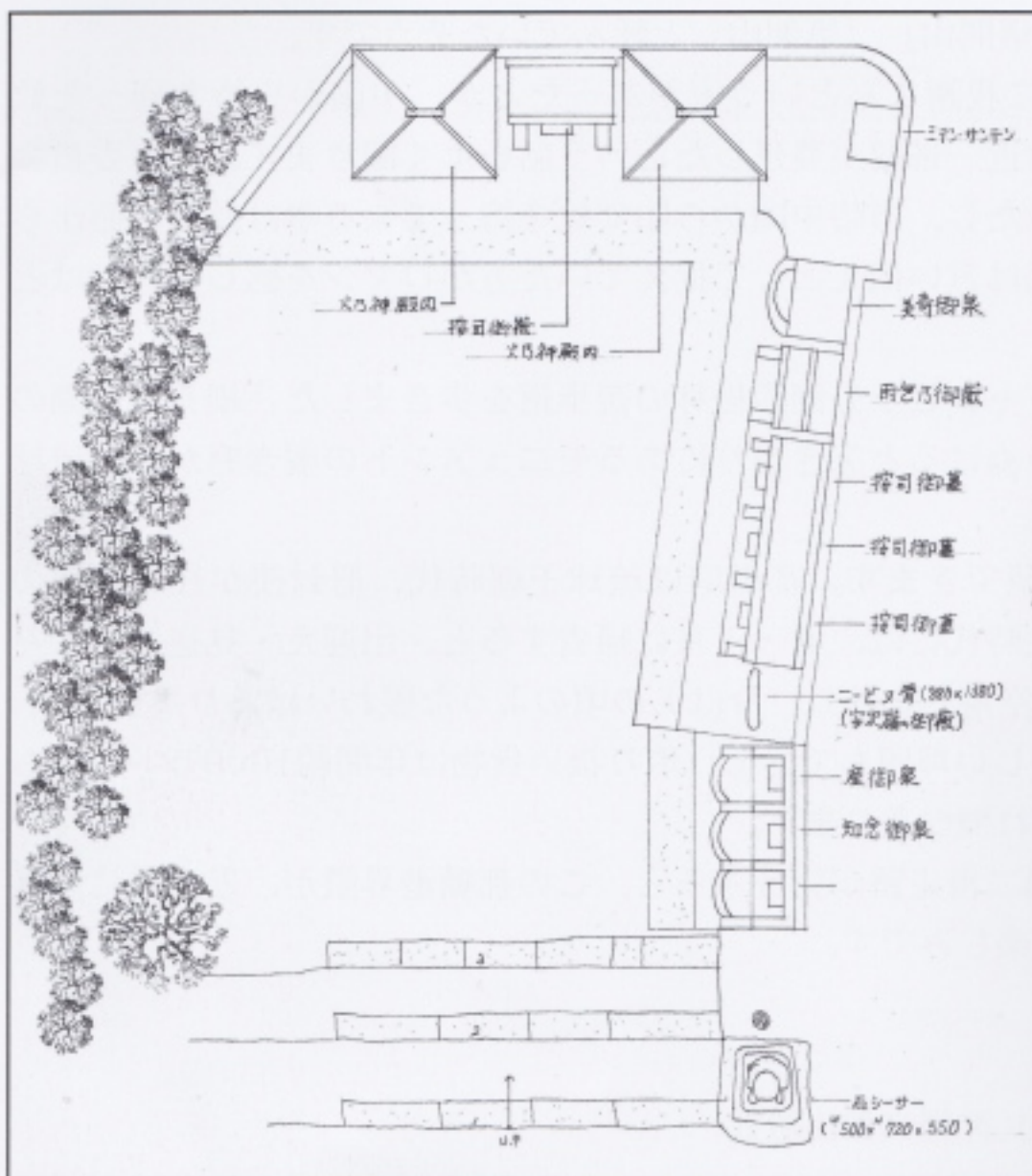


安次嶺又御嶽平面図、写真右敷地内のデイゴの神木、残念ながら昨年の台風で倒れてしまった。

基地内「上ヌ毛」から移設した安次嶺ヌ御嶽（宇栄原）

安次嶺ヌ御嶽は基地内の「上ヌ毛」に在った、戦後は、自由に拝めなくなって、1952年に小祿中学校南側裏門の近くに基地の中から引っ越したという。中学生の頃宇栄原、高良、具志、宮城のほとんどの学生がこの裏門より入り運動場を通り通学した。あれから33年が過ぎた。裏門脇の土手の頂にあった安次嶺御嶽は緩い坂を上がって行くと右側に石シーサーがドッシリと座っていた。3段の階段を上り詰めた広場正面には按司御嶽、両サイドに火ヌ神御嶽の3つの祠があった。右側（北側）に御泉、按司御墓、雨乞ヌ御嶽、ミチンサンテン等の9個の碑

が建つ、佇まいは長年この地にあった様な、いい雰囲気をしていた。小さい頃「御嶽では遊んでいけない、御嶽の木を折ってもいけない、御嶽から石コロを持って来てもいけない」と教えられてきた。御嶽は木が茂り、霊的な空間を帯びている所が多い。



宇栄原に移設した安次嶺ヌ御嶽、配置平面図、正面に火ヌ神殿内



左雨乞ヌ御嶽、右3基の按司御墓



基地内「上ヌ毛」から移設した安次嶺ヌ御嶽、宇栄原小祿中学校南側 1952 年～1998 年まで実在

ガジャンピラ公園

幹事 赤嶺 健次

ガジャンピラ公園へ行った事がありますか？明治橋から国道331号線を南西方向へ視線を走らせると、小高い稜線が目に入ります。その稜線に沿って東から西に松林の細長い緑地帯がガジャンピラ公園です。この地域是那覇市金城に位置し、戦後米軍に接収され民間人は立ち入る事ができませんでした。本土復帰後解放され、平成8年に公園として利用できるようになりました。

琉球王朝時代、冊封使はこの松林の小高い丘陵を「儀間山」「筆架山」と呼んでいたそうです。

「ガジャンピラ」という地名の由来は、坂の付近に我謝さんという家があったとか、中国から持ち帰った蚊（ガジャン）を坂の途中で転んで逃がしてしまっで付近一帯蚊が蔓延したという話をよく聞きます。教育委員会の方に聞くと、「調査はしたが我謝家は存在しなかったし、当時中国から船で蚊を持って来る事は蚊の生態からしても無理だ」とおっしゃっていました。これらの話は言い伝えとして捉えていた方がロマンを感じるのではと思いました。

先日の「うるくま〜い」で東西1キロに延びるガジャンピラ公園の松林の遊歩道を歩きました。細長い公園の中程にトンネル状の出入り口があります。トンネルをぬけると突き当りにあるモニュメントの覗き窓から、琉球王朝時代の宝物庫、御物城跡を眺めることが出来ます。

公園の一番西側の多目的広場からは、那覇港が一望できます。那覇港は琉球王朝時代、冊封使が往来し南の国々と中継貿易の拠点として発展してきました。学生時代には、盆・正月に帰省すると、出迎え・見送りの人々でたいへん賑わっていました。その後人の動き是那覇空港へと移り、今はあの頃のような賑わいはありません。

現在の那覇港へ泊、安謝の地域は埋め立ても進み新しい埠頭もできて、取り扱い貨物は年間約1000万トンにもおよび、大型クルーズ船による新たな人の流れも生まれつつあります。

近い将来垣花地区が解放され、さらに那覇空港の第二滑走路が完成すると、この那覇港界隈が、どの様に発展して行くのか、このガジャンピラ公園から眺めるのが楽しみです。

参照 ※『南島風土記』東恩納寛淳

※那覇の今と昔を語る『那覇今昔の焦点』沖縄文教出版社

※平成21年沖縄県土木建築部港湾課資料

※沖縄県立博物館紀要第3号（1997年）基地内文化財調査概要—御物城の考古学的知見—



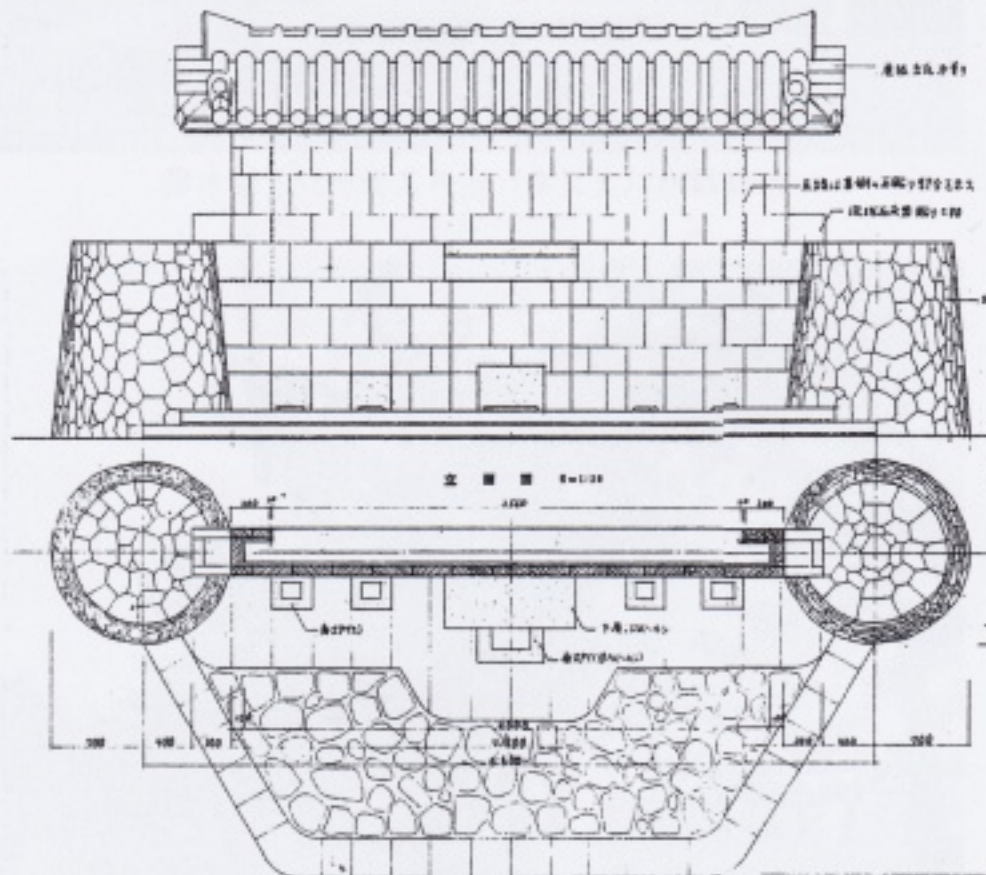
明治橋から見た儀間山—ガジャンピラ公園—

金城の御嶽

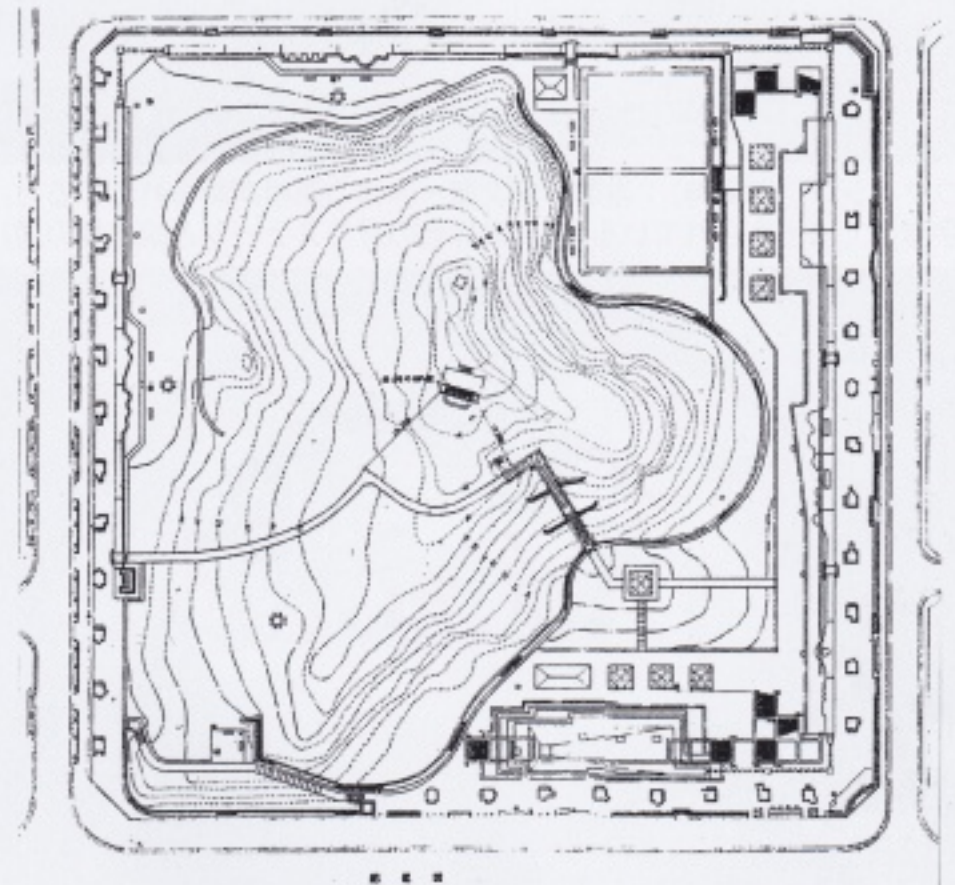
事務局長 赤嶺 和雄

金城の御嶽も「琉球国由来記」に記載の御嶽で、古くからその存在が知られていた。

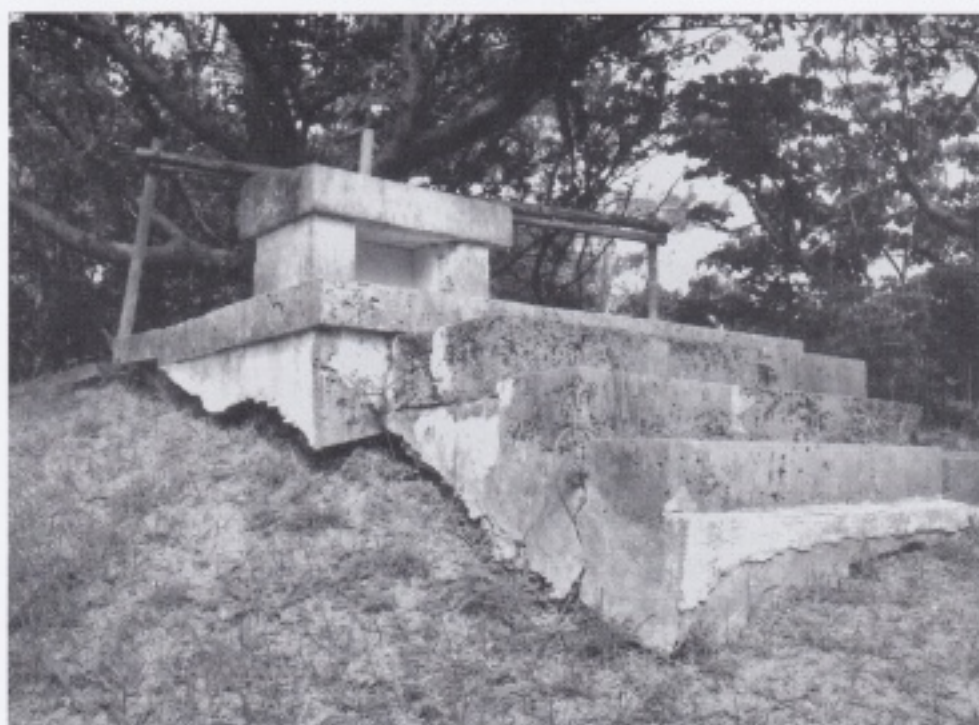
神名はアツメナノ御イペで所掌ノロは儀間ノロで在ったという。基地の中に在ったが、戦後小禄カトリック聖フランシスコ教会の道路西側に移転した。返還後金城土地区画整理事業が進み、小禄金城公園が出来ると、公園中央の小高い丘の上、元の御嶽の位置に戻された。



金城の御嶽 上立面図 下平面図



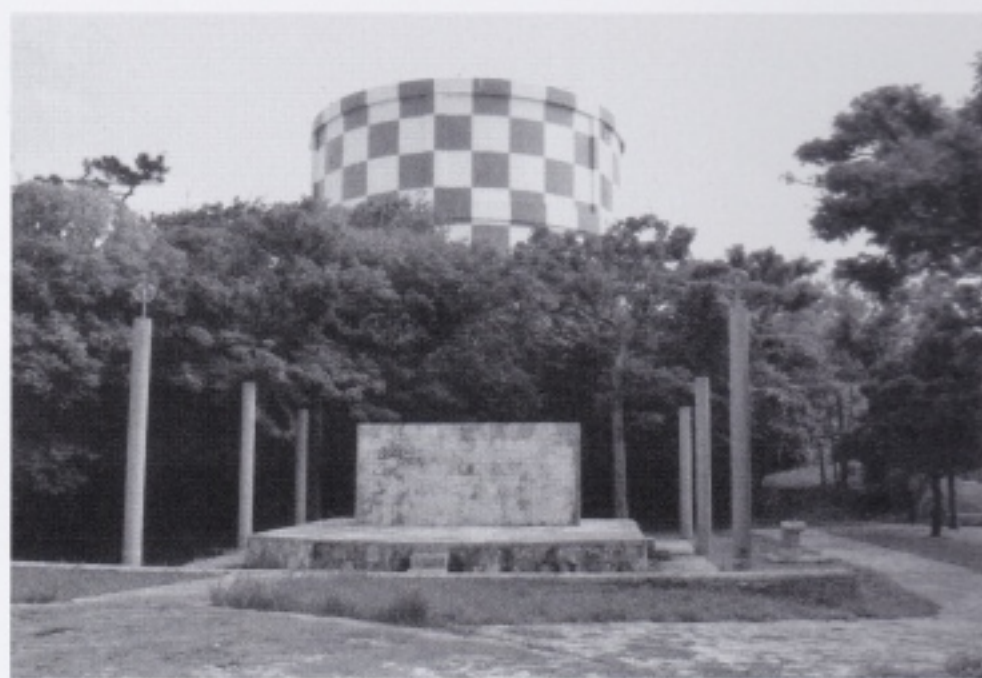
小禄金城公園 中央に金城の御嶽



ヒヌカン（火の神）



ウクラシン（御蔵神）：当間・安次嶺・赤嶺の開祖が祀られていると、字赤嶺では伝えられている。（赤嶺緑地の野外ステージと給水塔の間）



赤嶺緑地（上又毛）屋外ステージと給水塔



トンネル状の出入口から見たモニュメントー覗き窓から「御物城」ー



がじゃんびら公園 松林の遊歩道



三重城を望む



御物城を望む



第 9 回うるくま〜い参加者